

自己成長性における各因子間の関係と地域差

廣 瀬 春 次

教育基本法には、教育の目的として、心身ともに健康な国民の育成をあげているが、特に心の健康を考えると、それは欲求が満たされ緊張が解消した状態、あるいは社会規範に合致した行動がとれ精神的に安定した状態としてのみ捉えるべきでなく、「人格の完成をめざす」より積極的意味において把握されなければならないことは、教育基本法の示すとおりである。現在、この精神的健康の積極的側面に該当する概念として、Goldstein, Maslow それに Rogers らが主唱した「自己実現」という表現がよく用いられる。この概念には、自己の潜在的可能性を最大限に伸ばす、あるいは、より真の自己たらしめるといった意味が含まれている。教育の目的にこの自己実現をおくことは有意義である。何故なら、自己実現はどのような障害を持つ人にも認められる人間を人間たらしめる欲求だからである。例えば、身辺生活の自立の困難な心身障害児においては、その自立の達成は極めて大きな自己実現である。教師の重要な役割は、このような一人一人の個性にあった自己実現を援助することであり、当然、教育の評価は、基本的には他の子供と比較することではなく、その子供が以前より成長したかどうかという観点からなされるべきであろう。

ところで、梶田 (1980) が論ずるように、このような自己形成への意欲自体にもかなりの個人差があることは確かである。Allport (1954), Maslow (1961), Rogers (1966), それに上田 (1969) は自己実現者あるいは精神的に健康な人には次のような目立った特徴のあることを示唆している。(1)現実の正確な認識;精神的に健康な人は、そうでない人に比べ、自分の都合のいいように現実を歪曲して見ることが少ない。その結果、状況の変化を正確に予測し、適切な行動をとることができる。(2)自己受容;自己実現者は、欠点を含めた自己のあるがままの姿を意識化し、認めることができる。(3)統合性;自己実現者は、何らかの達成すべき課題を持っており、それに向かって自己の全ての人格機能を統合している。Erickson(1965) は、自己を賭けるべきものを見出すことのできない青年の苦悩を同一性拡散という言葉で表現している。その他の自己実現者の特徴としては、(4)自律性、(5)創造性、(6)親密な人間関係などがあげられよう。梶田 (1980) は、最近、自己形成ないし自己実現の意欲や態度を概括するものとして「自己成長性」という概念を用い、それを構成する因子を抽出し、その因子得点によって自己実現に関する意欲や態度の実態(個人差、年齢差など)を明らかにしようと試みている。具体的には、彼は自己成長性の諸側面(向上意欲、自信など)を表現する48項目を選び、それに対する回答を因子分析して、達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなざしの意識の4因子を抽出している。

本研究では、この梶田の自己成長性テストを鹿児島の中学生に実施し、項目間や因子間の相関を求め、各因子の特徴や因子間の関連などについての梶田の仮説並びに調査結果を再確認することにした。それと同時に、東京と鹿児島の中学生の各因子得点を比較し、地域により自己実現の様相が

どのように異なるかも検討してみる。前者に関して言い訳をつけ加えさせていただくと、因子分析では各因子の独立性が基本的仮定であり、一般的には因子間の相関を求めることはないが、自己実現は全人格的なものであり、達成動機や自己受容などの人格要因の単なる寄せ集めでないことを考えれば、この種の分析は決して無意味ではないと考えた。

方 法

調査対象 鹿児島県内の3つの中学校（市内中心地区のA校、市内周辺地区のB校、それに市外の近効農村地区のC校）の中学1年・2年の男女学生863名（中学1年男子214名、女子227名；中学2年男子215名、女子207名）

検査日 昭和59年の10月から11月にかけて実施した。

実施検査 検査用紙には、付表に示す自己成長性の4つの軸に関連した31項目を各因子が交互にくるよう配列しており、すべての項目に対して「はい」「いいえ」「わかりません」の3件法による回答が求められている。

結果と考察

自己成長性を構成する各因子間の関係

各因子間の相関は、「はい」「いいえ」「わかりません」の各回答に対して、+1, -1, 0の得点を与え、その得点に付表に示す因子負荷量をかけた因子得点を用いて計算した。ただし、付表に示されるように、第1因子と第2因子に重複する「他の人にくらべて能力などがすぐれていると思う」、第3因子と第4因子に重複する「他の人をとてもうらやましく思うことがある」の2項目のデータは除外した。表1にはその結果が示されている。

表1 自己成長性を構成する因子間の相関

(I : 達成動機, II : 努力主義, III : 自信と自己受容)
(IV : 他者のまなざしの意識)

| | 中 学 1 年 | | 中 学 2 年 | |
|----------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | (N = 214) | (N = 227) | (N = 215) | (N = 207) |
| I · II | .4954 | .3064 | .4258 | .3611 |
| I · III | .0476 | .0200 | .0742 | .0544 |
| I · IV | .0484 | .1807 | .1606 | .1071 |
| II · III | .1882 | .1813 | .2331 | .2211 |
| II · IV | -.2868 | -.1471 | -.1548 | -.1891 |
| III · IV | -.4448 | -.4124 | -.4635 | -.4200 |

結果は明らかに、第1因子の達成動機と第2因子の努力主義の間に、それに第3因子の自信と自己受容と第4因子の他者のまなざしの意識の間に強い連関があり、その他の組み合わせにはあまり強い相関はないことを示している（特に達成動機と他者のまなざしの意識の因子間にはほとんど連関が認められない）。この結果は、このテストが大きな2つの軸から構成されていることを示している（ただし努力主義の因子は、他の軸を構成する因子とも低い相関が認められる）。正木（1955）は、「自我」概念を整理するに際して、主体としての自我であるのか客体としての自我であるのかが重要な視点の1つであることを述べている。上に述べた2つの軸は、この自我の2つの側面と密接につながっているように思われる。即ち、第1と第2因子は成長への意欲や態度を示す行為者としての自我（主我）の側面を捉えているのに対し、第3と第4因子は内省を通して意識された自我（客我）をあらわしている。自己意識が行動を規定する要因であること、主我也意識されうることなどを考慮して、ここでは、自己実現は自我の2つの機能の統合を通して達成されると述べておこう。

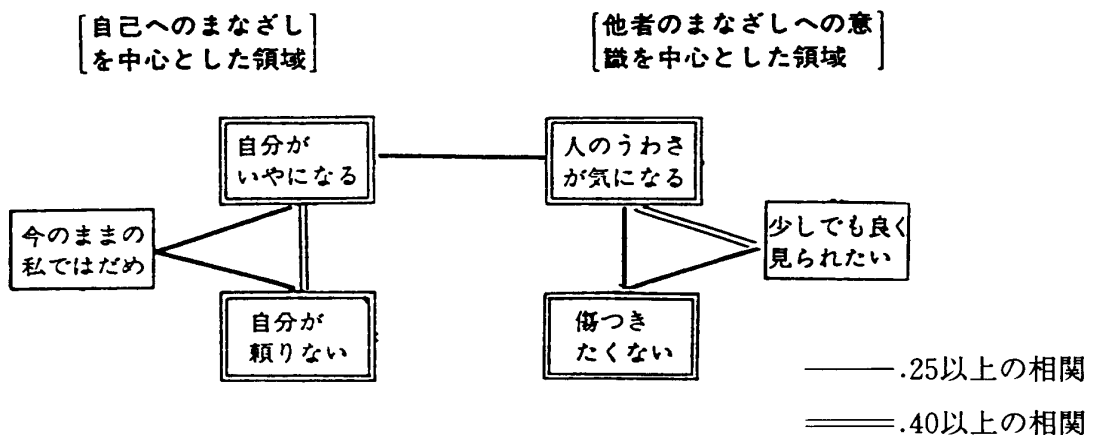


図1 男子中学生の自己評価意識の内部連関

ところで、第3と第4の因子は、梶田によれば自己意識の中の特に自己評価的意識を表わすものである。つまり第3因子は自己へのまなざしを中心とした領域と関わっており、第4因子は他者のまなざしの意識を中心とした領域を含んでいる。梶田は、他者のまなざし→自己を見つめるまなざし、といった形で両者を安易に関連づけることに警告を与えている。ところが、本研究の結果では両因子間に高い相関が見られ、2つの自己意識領域間に果してそのような独立性があるかどうか疑問が生じた。そこで独立性を簡単にチェックするため、梶田の分析に基づき、男子においてそれぞれの領域に中心的な項目を3つ選び、それらの相関を調べてみた。図1からわかるように、男子のデータに関してはある程度2つの領域間に独立性が認められ、梶田の分析結果が再確認された。以上から、本稿では次のように結論する。第3因子は自己評価という点で他者のまなざしにその起源をもつが、発達に伴い次第にそれから分化した機能を持つようになった領域である。

表2 東京と鹿兒島の中学生における自己成長性の因子得点
(数値は因子得点の平均、カッコ内は標準偏差)

| | | I 達成動機 | | II 努力主義 | | III 自信と自己受容 | | IV 他者のまなざしの意識 | |
|-----|----|--------|--------|---------|--------|-------------|--------|---------------|--------|
| | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 鹿兒島 | 中1 | .171 | .131 | .110 | .115 | -.172 | -.269 | .032 | .125 |
| | | (.151) | (.152) | (.125) | (.112) | (.196) | (.189) | (.229) | (.226) |
| 東京 | 中2 | .150 | .132 | .113 | .121 | -.177 | -.300 | .031 | .150 |
| | | (.147) | (.141) | (.112) | (.109) | (.205) | (.178) | (.232) | (.222) |
| 東京 | 中2 | .212 | -.122 | -.295 | .024 | .115 | -.076 | .062 | .007 |
| | | (.128) | (.126) | (.108) | (.099) | (.113) | (.120) | (.127) | (.123) |

自己成長性の地域差と学年差

表2は、梶田が調査した東京の中学2年生における自己成長性の因子得点と本研究での鹿兒島の中学1・2年生の因子得点とを並べて示したものである。

東京と鹿兒島の地域間比較は、両者の中学2年生の間でt検定を用いて行なった。まず達成動機に関しては、男子では両地域間に因子得点の大きな差は認められないが、女子では明らかに鹿兒島の中学生の方が高いことが示された ($P < .001$)。次の努力主義に関しては、男女共に東京にくらべ鹿兒島の中学生において、その態度が強く見られた (いずれも $P < .001$)。逆に、自信と自己受容については男女とも鹿兒島より東京の中学生の方が低く (いずれも $P < .001$)、他者のまなざしの意識については、男女とも鹿兒島の中学生の方が高いことが認められた (いずれも $P < .001$)。以上から、東京の中学生にくらべ鹿兒島の中学生は、1) 自信がなく、自己を否定的に見、2) 他人の目を気にする傾向があるのに対し、3) 努力する意志は強い、のである。最初の1)と2)の傾向は、自信のない者の方が周りの目を気にしやすいという常職的見解と一致している。しかし、1)・2)と3)との間の関係は一般的とは言い難い。梶田も述べているように「自らの内に自信と自己受容という自らの現状への落ちつきがあって始めて、自己成長ないし自己形成への努力も着実なものになる」のである。実際に、第2因子得点の上位者215名 (全体の25%) と下位者215名において他の因子得点を比較してみると (表3)、努力する態度の欠ける者ほど自信がなく、他人の目を気にしやすいという傾向が認められる。地域間比較の際、このような心理学上の一般的法則と矛盾する傾向が見出されるのは、恐らく、その地域固有の感じ方、思想などによって個々の質問項目に対する反応が影響されるためであろう。つまり、自然な人格特性間の体系とは別に、極端には、高い目標をもち (現実的自己と理想的自己の差が大きいほど自己受容は低くなると考えられる)、それに向かって自己を律し努力する、あるいは、さほど高くない現実的な目標をもち、チャンスを生かし要領よく生きるといった地域特有の価値体系が反応に影響しているのかもしれない。

最後に学年差について触れてみると、梶田の研究では小5と中2のデータが比較され、その結果、達成動機、努力主義それに自信と自己受容のいずれの因子においても、小学生から中学生になるに

表3 第II因子得点上位群と下位群における他の因子の得点値（カッコ内はSD）

| | 第II因子 | 第I因子** | 第III因子** | 第IV因子** |
|-----|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 上位群 | .039 (.073) | .071 (.151) | .266 (.201) | .130 (.230) |
| 下位群 | .286 (.056) | .221 (.122) | .168 (.218) | .021 (.218) |

** P<.001

つれ大きく下降することが認められた。梶田は、この結果から、年齢の増加と共にやる気や努力を失っているのではないかと心配しているが、鹿児島県の中学1年生と2年生を対象とした最近の織田の研究でも中学1年と2年の間で自己成長性の著しい低下が認められている。しかし、本研究では少なくとも中学1年と2年の間にはその種の下降傾向は存在しない。

〈付記〉 本論文の作成にあたり、データの収集に御尽力下さいました鹿児島大学教育学部の島田俊秀教授、松田君彦助教授、大坪治彦助教授に厚く感謝いたします。

付表 自己成長性に関わる各因子の主要項目と因子負荷量（梶田，1980）

第I因子：達成動機

1. 自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみたい (.592)
2. 他の人にはやれないようなことをやりとげたい (.548)
3. 将来立派な仕事をしたい (.542)
4. 将来他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う (.502)
5. 自分の理想に向ってたえず向上していきたい (.471)
6. 新しいことやちがうことをいろいろしてみたい (.465)
7. 自分の主張を通す方である (.426)
- 8*. 他の人に比べて能力などがすぐれていると思う (.402)

第II因子：努力主義

1. 一度自分で決めたことは途中でいやになってもやり通すよう努力する (.484)
2. 他の人に認められなくても、自分の目標に向って努力したい (.469)
3. 何でも手がけたことには最善をつくしたい (.456)
4. 現在の自分が幸福だと思う (.426)
5. 努力さえすれば成績はよくなると思う (.384)
6. チャンスを逃さなければ、能力のある人は偉くなれると思う (-.379)
7. 人の一生は案外偶然のでき事で決まるものだと思う (-.378)
8. 人とうまく付き合っていける方である (.359)
9. どんな不幸に合ってもくじけないだろうと思う (.350)

第Ⅲ因子：自信と自己受容

1. 勉強や運動について自信を持っている方である (.605)
2. 自分を頼りないと思うことがよくある (－.588)
3. 今のままの自分ではいけないと思うことがよくある (－.576)
4. 現在の自分に満足している (.577)
5. ときどき自分がいやになることがある (－.555)
6. 人より劣っているのではないかと思うことがよくある (－.506)
- 7*. 他人をとてもうらやましく思うことがよくある (－.420)
- 8*. 他人に比べて能力などがすぐれていると思う (.409)

第Ⅳ因子：他者のまなざしの意識

1. 他人からどんなうわさをされているか気になる方である (.626)
2. 自分が少しでも人からよく見られたいと思うことが多い (.567)
3. 小さいことをくよくよと考えることが多い (.539)
4. 何かをしようとする時他人が反対するのではないかと心配になる (.526)
5. 自分の心が傷つくようなことを恐れている (.488)
6. “あんなことをしなければよかった” とくやむことが多い (.455)
- 7*. 他人をとてもうらやましく思うことがよくある (.438)
8. 人からばかにされたりすることにがまんできない (.352)

[参考文献]

- Allport, G.W. 1961 Pattern and growth in personality. Holt. 今田恵 (監訳) 1968 人格心理学 (上・下) 誠信書房
- Erikson, E.H. 1965 Identity and the Life Cycle; Selected paper. Psychological Issues, 1(I). 小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房
- 梶田穀一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 正木正 1955 「自我」教育学辞典, 第3巻, 平凡社
- Maslow, A.H. 1954 Motivation and Personality. Harper & Row. 小田忠彦 (監訳) 1971 人間性の心理学 産業能率短期大学出版部
- 織田あゆみ 1985 思春期の問題と学級経営 鹿児島県教育心理研究会, 第29号
- ロージャズ C.R. 著, 伊東博編訳 1966 ロージャズ全集, 第4巻, サイコセラピの過程 岩崎学術出版社
- 上田吉一 1969 精神的に健康な人間 川島書店

(昭和60年9月17日受理)